

平成21年6月10日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19610003
 研究課題名（和文） 移行体制下の中央アジア諸国における民族集団、宗教、言語文化の動態に関する研究
 研究課題名（英文） Research Project on the Dynamics of Ethnic Groups, Religions and Languages in the Contemporary Central Asia
 研究代表者
 小野澤 正喜（ONOZAWA MASAKI）
 筑波大学・名誉教授
 研究者番号：90037044

研究成果の概要：

ソ連邦崩壊後に成立した中央アジア諸国（ウズベキスタン、キルギス、カザフスタン、タジキスタン、トルクメニスタン）における民族、宗教、言語文化の変化過程を研究対象とした本プロジェクトでは、タシケント東洋学大学内に設置された筑波大学中央アジア国際連携センターを拠点に、新秩序形成期の基礎資料収集を行い、今後の多民族共存、市民社会形成、宗教復興運動といった問題系への展開の方向が明確となった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学 ・ 文化人類学・民俗学

キーワード：中央アジア、民族運動、言語政策、宗教運動、市民組織、民族文化、民族的アイデンティティ、移行経済体制

1. 研究開始当初の背景

1991年にソ連邦が崩壊する中でCIS諸国が成立したが、中央アジアではウズベキスタン、キルギス、カザフスタン、タジキスタン、トルクメニスタンの5カ国が独立を達成した。多くの民族集団が共存し、宗教的にも多民族的な各国は、旧ソ連邦の頽木から解放され、それぞれの状況に応じて国家形成の過程を辿りつつある。各国における政治変動

の方向はいまだ不透明だが、上海協力機構等の国家間の新秩序形成の兆しが見られる。

他方で、各国において開始された脱社会主義の動きの中で、民族集団の活性化と宗教組織の国境を越えた活動が顕著である。しかし、こうした中央アジアの新社会秩序に関する調査研究は、社会的な要請に比して、立ち遅れているのが現状である。

本研究プロジェクトは中央アジア5カ国

のうち、現地における調査研究と現地研究者との共同作業が可能である4カ国（ウズベキスタン、キルギス、カザフスタン、タジキスタン）を選び、その社会・文化の動態に関する先駆的な実態解明を行うものである。

調査対象の焦点は、復活した民族集団や宗教集団の動態、そして日常使用言語の変化である。民族集団に関していえば、旧ソ連邦統治下では、「民族自決権の尊重」の建前は実現を見ず、実態としては否定されていた。独立国家成立後、各共和国の中の支配的民族集団が自民族中心の国家統合を企図する一方で、少数民族集団が抵抗運動を展開している。各国における民族紛争の噴出については、その原点を帝政ロシアや旧ソ連邦の支配以前の各民族の固有の歴史にあることを認識し、遡及的な解明を行う必要がある。

宗教に関していえば、社会主義体制下では抑圧されていた、諸宗教の活性化の波を確認することができる。とりわけイスラム教は、政治方針をめぐる内部的分岐を随伴させつつ、活発な組織化と政治改編を求める運動が国境を跨いで推進している。

加えて、民族と宗教は現在進行中の社会変化の軸であるが、その直接的な反映は日常使用言語において確認できる。ロシア語から民族言語への変更、キリル文字表記からローマ字表記やアラビア語表記への切り替え、英語やアジア言語学習の拡大等の中に、ロシアの覇権をはねのけて台頭する、民族的宗教的アイデンティティを読み取ることができる。

以上のように、本プロジェクトでは中央アジア各国で進行しつつある、上記の変化と動態を、人文社会科学の諸分野で実績のある日本および中央アジアの研究者を組織し、2年間にわたる共同研究を通じて解明することをめざす。具体的には、民族集団、宗教集団及び言語文化の3つの領域につき、研究班を構成し、諸資料の収集、アンケート調査、現地の視察や面接調査等を進め、分析を深める。それと共に、月例研究会の討議を通じて3つの分野の総合的解明を進めようとするものである。

現在、各国共に大規模な現地調査を展開することが困難な状況下で、本プロジェクトでは中央アジア各国の実態に関する基礎的なデータの体系化、および進行中の事態の把握という先駆的な作業を行うことをめざす。そのことを通じて、国内外の学会や中央アジアでの経済協力等のステイクホルダーに対して、さらなる学術的な貢献を行うと共に、次なる国際共同プロジェクトの基盤を固めようとするものである。

2. 研究の目的

研究代表者をはじめとする筑波大学の研

究者は、最近3年間の努力を通じて中央アジア4カ国の12の大学および研究機関との間で学術交流協定のネットワークを構築してきた。その過程で、タシケント東洋学大学キャンパス内に、筑波大学中央アジア国際連携センターを設置し、活発な研究交流と教育交流活動を開始している。また筑波大学内においても、人文社会科学研究科内に連携センター事務局を置き、多様な国際交流活動を推進している。

こうした基盤整備の実情を踏まえ、本プロジェクトでは、移行体制下の中央アジア地域の社会変動と新秩序の形成過程を、学際的総合的に把握することをめざす。具体的には、2年間にわたる本研究計画全体を通して、連携研究者、研究協力者の課題別分担をしつつ、データの収集と検討を進める。同時に宗教、国の違いを勘案した統一的な調査項目表と質問票を作成し、同一項目に関する比較が可能となるサンプルデータの収集に努める。

また連携研究者の作業は、国内外の文献資料、インターネット等による資料収集と分析を基本とし、各年度各研究班の研究者を現地に派遣し、現地調査と資料収集に当らせる。現地側の海外研究協力者は、それぞれの国において資料収集と分析を進めると共に、各年度総合的共同研究作業と研究発表会のための招聘を行う。

具体的な調査方法だが、初年度1年目の調査研究は、各国の首都圏中心に組織された民族集団、宗教組織の実態分析を中心に進める。これらの中心組織からトップダウンの傾向を持って進められつつある再編、活性化の動きの全体構造の掌握に力点を置く。調査対象を大都市圏に定めつつ、地方都市との国内的ネットワークを通じて、トップダウン的变化がどこまで浸透しているかも研究を進める。

また近年、海外出稼ぎ等によって、欧州や東アジア諸地域への海外在住者との国際的ネットワークが重要な役割を果たしているとの指摘がなされていることを考慮し、インターネット等最新のメディアを使ったグローバルな展開の実態把握を、組織外部の側から努める。加えて、言語文化についても、首都圏における変化に着目した研究を進める。月例の研究会を組織し収集した資料、情報の共有に努めると共に、分析・総合を深める。その上で、現地調査や海外の協力者の報告も月例の研究会を軸に組み込んでゆく。

第2年度の調査研究は、各国の種々の変化に対するボトムアップの動きと、中心部からの働きかけに対する反応の実態把握を中心に進める。初年度の調査が民族・宗教組織の中心から発信されるトップダウンの変化、あるいは組織中枢のアクターの意図等に注目するのに対し、2年目の調査はそうした変化を担う基礎ユニット、すなわち個人、家族、

地域共同体、市民社会における日常生活レベルにおける変化に調査の力点を移し、本プロジェクトが企図する上からと下からの両面からの総合的把握をめざす。2-3月には内外の研究者を招いた研究集会を開催する。

3. 研究の方法

2年間にわたる本研究計画全体を通しての研究組織は連携研究者の分担をウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタンと国別編成を基本として組織した。また研究課題にそって民族集団の動態分析班、宗教集団の動態分析班、言語文化の動態分析班の3組織を編成した。各班における共同研究を進めつつ現地調査派遣も行った。参加者全員が問題群と調査法を共有するため、定例の共同研究会を開催し研究班相互の情報交換と分析枠組みにおける統合性を確保した。また宗教、国家の違いを勘案しつつ統一的な質問票を各国版で作成し使用する努力を行い、言語文化動態分析班においては有効な質問票調査を進めることができた。民族集団動態分析班、宗教集団動態分析班においても新たな視点からの面接調査、参与観察を進めることができた。

4. 研究成果

本研究プロジェクトの代表者および連携研究者は、筑波大学の研究者を中心にして組織しており、既に3年間にわたる研究会と教次にわたる国際シンポジウムを通じて準備を進めてきた。そのために、本プロジェクトにおいても、学際的新領域開拓の実をあげることができた。

移行体制下にある、中央アジア各国の情報収集および現地渡航・調査研究は大きな制限がある。そうした状況下で、我々は先駆的努力を通じて、中央アジア4カ国の12の拠点大学・研究機関との間で学術交流協定のネットワークを構築し、活発な研究交流と教育交流活動をすでに開始していたため、予想された困難に直面することもなく、調査遂行・実施が可能となった。

とくに、タシケント東洋学大学キャンパス内に設置された、筑波大学中央アジア国際連携センターの存在は、特筆すべきである。同センターは、第2回「中央アジア+日本」の外相会議で出された「行動計画」においても高く評価されているところであり、これにより海外の研究者に対して認められる最大限の便宜供与と協力・支援を受けることが可能となった。

また本プロジェクトの目的自体は調査期間が2年間であったため、研究対象は予備的かつ基礎的なものを当初より指向し、調査自

体も小規模のものに留まらざるを得なかった。しかし、他方で並行して進行する各種交流・教育活動（大学間研究交流、英語特別プログラムによる国費留学生受入れ、JICE-JDS留学生受入れ、JASSO支援の短期留学交流等）を通じて、本プロジェクト以外の資金による研究者、大学院生の相互交流も確保できるなど、本プロジェクトが生んだ波及効果や副次的な影響が教育面にも及んでいる。

調査・研究の面では、国際的な欧米研究機関や海外からの研究者の入国、さらには調査や国際連携に各種の制限がある中で、既に交流協定のネットワークを構築している我々は、多くの面で先行していることが実証された形となった。加えて、研究組織の中心に位置するウズベキスタン出身の国際政治学研究者ティムール・ダダバエフ准教授は、国際共同研究の実をあげる上で重要な役割を果たしてくれた。

また基礎調査のデータ収集過程から、将来的にはE. ゲルナーのイスラム社会研究や、A. コーエンのエスニシティ研究等多くの仮説を実証的に検証しつつ、中央アジア研究のための新たなモデルと方法論の検討が次なる興味深い問題系として浮かび上がってきた。さらに、早期に克服されるべきである中央アジア研究面に見られる分断状況、すなわち東洋史等による西域史研究、ロシア支配下の中央アジア研究、ソ連時代の中央アジア研究、独立後の中央アジア研究の4つの位相の研究の没交渉的状况は、一つのディシプリンに留まらない学際的なアプローチによってのみ克服可能であると、確認を得るに至った。

今後はそうした次なる課題に向けて、総合大学としての筑波大学の有する人材と交流協定のネットワークを通じた、研究協力体制の更なる確立を目指し、他方で学際的、通時代的な研究アプローチを一層練成していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

①USUYAMA, TOSHINOBU

「Social and Linguistic Research into the Situation in Kyrgyzstan's Bishkek, Karakol and Osh Cities」『Tsukuba Working Papers in Linguistics, Special Issue』2009. Pp. 21-44. 査読有

②ティムール、ダダバエフ

「地方主義と国家—ウズベキスタンとタジキスタンにおけるソビエト人事政策とその影響」『国際政治経済学研究』第21号. 2008年. 13頁-37頁. 査読有

③Timur, Dadabaev

「Introduction to the Survey Research in Post-Soviet Central Asia: Tasks, Challenges and Frontiers」『Asian Research Trends: New Series (NART)』No.3, 2008. Pp.45-70. 査読有

④小野澤正喜

「中央アジアと日本の交流の歩みと将来展望：筑波大学の役割に関連させて」『第6回文明のクロスロード：ことば・文化・社会の様相』筑波大学中央アジア連携センター。2008年。1頁-3頁。査読無

⑤西村よしみ

「知的対話による学生の交流活動」『第6回文明のクロスロード：ことば・文化・社会の様相』筑波大学中央アジア連携センター。2008年4頁-5頁。査読無。

⑥鈴木伸隆

「訳語としての「文化」：近代日本における「文化」概念の輸入とその変遷」『第6回文明のクロスロード：ことば・文化・社会の様相』筑波大学中央アジア連携センター。2008年。100頁-111頁。査読無

〔学会発表〕(計8件)

①小野澤正喜

「中央アジアと日本の交流の歩みと将来展望」『国際会議「文明のクロスロード6：ことば・文化・社会の様相」』2008年9月14日。ウズベキスタン共和国・タシケント国立東洋学大学

②西村よしみ

「中央アジアにおける今後の日本語教育の可能性について」『国際会議「文明のクロスロード6：ことば・文化・社会の様相」』2008年9月14日。ウズベキスタン共和国・タシケント国立東洋学大学

③鈴木伸隆

「訳語としての「文化」：近代日本における「文化」概念の輸入とその変遷」『国際会議「文明のクロスロード6：ことば・文化・社会の様相」』2008年9月14日。ウズベキスタン共和国・タシケント国立東洋学大学

④西村よしみ

「日本語 E-learning の教材作成」『フランス日本語教育シンポジウム』2008年4月10日。フランス・リール第三シャルル・ド・ゴール大学

⑤益田岳

「科学技術とヒューマニティ：技術者の伝統と人のしあわせ」『日本中央アジア学生知的交流会議』2008年3月19日。ウズベキスタン共和国・ウズベキスタン日本センター

⑥MASUDA, GUKU

「The Revolutionary Shift in Arabic Literacy in Malaysia: Tok Kenali's

Learning Method」『文明のクロスロード5』March 19, 2008. Tashkent Institute of Oriental Studies, Uzbekistan.

⑦MASUDA GAKU and ONOZAWA MASAKI 「On the Comparative Studies of the "Mahalla"-like Communal Entities as the Basis of the Civil Societies Covering East and Southeast Asian Countries」『Formation of Civil Society in Uzbekistan: Its Present State, Preliminary Results and Perspectives』September 20, 2007. Bukhara, Uzbekistan

⑧西村よしみ

「作文の自動評価に向けて：言語研究と言語教育の対話」『日中韓特別シンポジウム』2007年8月21日。中国・大連外国語大学

〔図書〕(計3件)

①ティムール・ダダバエフ

『社会主義後のウズベキスタン：変わる国と揺れる人々の心』(アジアを見る眼) アジア経済研究所。2008年。全216頁

②中村逸郎

『ロシアはどこに行くのか：タンデム型デモクラシーの限界』講談社。2008年。全246頁

③塩尻和子

『イスラームの人間観・世界観：宗教思想の深淵へ』筑波大学出版会。2008年。全322頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野澤 正喜 (ONOZAWA MASAKI)
筑波大学・名誉教授
研究者番号：90037044

(3) 連携研究者

塩尻 和子 (SHIOJIRI KAZUKO)
筑波大学・国際部・特任教授
研究者番号：40312780

西村 よしみ (NISIMURA YOSHIMI)
筑波大学・大学院人文社会科学研究所・教授
研究者番号：40208228

中村 逸郎 (NAKAMURA ITSUROU)
筑波大学・大学院人文社会科学研究所・教授
研究者番号：40326400

箕輪 真理 (MINOWA MARI)
筑波大学・大学院人文社会科学研究所・准教授
研究者番号：30344857

ティムール・ダダバエフ (TIMUR DADABAEV)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：10376626

臼山 利信 (USUYAMA TOSHINOBU)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：503232225

鈴木 伸隆 (SUZUKI NOBUTAKA)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：10323221

三浦 哲也 (MIURA TETSUYA)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・研究員
研究者番号：80444040

(4)研究協力者

益田 岳 (MASUDA GAKU)
京都大学・東南アジア研究所・研究員